

小説の道中を歩く「草枕」の旅・第1章 (全コース版)

明治30年、第五高等学校教師として熊本にいた夏目金之助(漱石)先生。暮れも押し迫った頃、正月をゆくり過ぎようと、熊本市街から最も近い温泉場として賑わっていた小天温泉・前田案山子の別邸にやって来ました。この旅が、小説「草枕」のモデルとなった、いわゆる「草枕の旅」というわけです。

熊本市郊外から2つの峠の茶屋跡を経て前田家別邸まで、旧道筋に設定された「草枕」の道にはいたるところに往時の面影が残り、小説「草枕」の道中が体感できます。

① 鎌研坂 (かまとぎざか)



熊本市の北西郊外、島崎の岳林寺を起点として設定された「草枕」の道。最初のポイント鎌研坂は金峰山への谷あいにある。最も往時の道の状態を保っている。「山路を登りながら、こう考えた」。有名な冒頭の一文の場所と思われる。

② 鳥越の茶屋跡 (とりごえのちややあと)



「おい」と声を掛けが返事がない。軒下から奥をのぞくと煤けた障子が立ってきてある。向こう側は見えない。

「草枕」には峠の茶屋は一軒しか出てこないが、当時、熊本から小天への道中には、ここ鳥越と野出(のいで)の二つの茶屋があったという。この鳥越の茶屋跡には井戸跡が面影を感じさせる。県道との間には現代の茶屋が営まれ、往時の茶屋を復元した資料館も建つ。

③ 金峰山北麓 (きんぼうさんほくろく)



路は存外広く、且つ平らだから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。……五六間先きから、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらわれた。

金峰山北麓ではこの一節を感じさせる竹林に出会う。

④ 石畳道 (いしだたみのみち)



「草枕」の道の大半は、明治30年当時、熊本と高瀬(現在の玉名市)を結ぶ往環だった。

追分を小天へ数十メートル先、県道から山あいに分け入ると、中ほどから石畳が始まる。ここは往時の面影を深く残していて、散策するファンに最も人気がある。薄暗く、苔むし、竹の落ち葉におおわれた石畳にたたずめば、いつしか世俗を忘れ、向こうから漱石先生が歩いて来るような錯覚さえ覚える。

⑤ 野出の茶屋跡 (のいでのちややあと)



ここまで来ると眼下に海が見える。右手に有明海と雲仙。左手に宇土半島を隔てて天草の遠望。

かつては、ここに隣接して茶屋が建っていた。当時、小天からは馬に背負わせたみかんを熊本市新町の市場に出荷していた。朝まだ暗いうちに家を出、峠にさしかかるところ明るくなる。この茶屋には各戸が預けた提灯が軒先に並んでいたという。「〇〇さんもう行つたらすたい。△△家は今日はお出ささんとだろか。」といった会話が交わされていた。

今は、幹線はむろん一般道からも離れ、行き交う人も少ない。間もなく市境。那古井の里・小天は目前。

一山を越えて落ちつく先の、今宵の宿是那古井の温泉場だ。

<方言> もう行つたらすたい=すでに出発している。出ささんとだろか=出荷しないのだろうか。



⑥ 「白壁の家」前田家本邸跡

(しらかべのいえ まえだけほんていあと)

※民間住宅地のため見学立入は不許可。



「二丁程上ると、向こうに白壁の一構えが見える。蜜柑のなかの住居だと思う。」

と書かれているのが前田家本邸のこと。屋敷の様態は明らかではないが、2階建ての母屋に2棟の茶室、新旧の蔵と黒門があり、新蔵には、宮崎滔天に頼まれて、一時外国人を住まわせたことがあるという。

「城下(熊本)まで他人の土地を踏まずとも行ける」というほど栄華を誇った前田家だが、長年にわたる政治活動や家庭の分裂騒動をきっかけに急激に衰退。明治34年12月24日夜の失火によって本邸は焼失。小天のシンボルともいえた「白壁の家」はついに再建されなかった。

⑦ 漱石画「わが墓」のモデル 前田家墓所

(そうせきが「わがはか」のモデル まえだけぼしよ)



海に浮かぶ山に一つの墓石を配した漱石の自筆画「わが墓」。それは、この墓所から眺めた有明海と雲仙がモデルといわれている。

「僕は帰つたらだれかと日本流の旅行がしてみたい。小天行きなど思い出す」は、漱石がロンドンから、一緒に小天に旅した山川信次郎へ宛てた手紙。そのころ、英国留学中の漱石は心身共に苦しい状況にあったといい、そんな中で、前田家別邸での数日が蘇つたのだろう。帰国後、ほどなくして、この絵は描かれ、その後「草枕」も執筆している。それほど小天の記憶は鮮明で、まさに、漱石にとって桃源郷だったのだろう。

⑧ 宮崎龍介の学び舎・八久保小学校跡

(みやざきりゅうすけのまなびや・はちくぼしょうがっこうあと)



旧八久保尋常小学校の跡。碑文は宮崎龍介筆。明治30年頃、ここに前田案山子の三女・ツチの長男・龍介が学んでいた。

荒尾の宮崎滔天に嫁いだツチは中国革命運動へ没頭し家庭を顧みない夫に代わり、石炭販売などで家計を支えていた。その際前田家を頼って預けられた龍介はここで4年間学んでいる。

その後、東京帝国大学へ進んだ龍介は、筑豊の石炭王伊藤伝右衛門の妻であった歌人柳原白蓮と知り合い、「大正のロマンス」で知られる恋愛の末結ばれている。

⑨ 日潮士・前田案山子の墓

(につちょうし・まえだかがしのはか)



「草枕」の中で、『白い髭をむしゃむしやと生やし』た『志保田』の隠居。このモデルが、第一回衆議院議員(明治23年)を引退し、別邸で隠居生活をしていた前田案山子である。

細川藩の槍指南であった案山子は、維新に際し、今後は農村、農民を支援するという意味から田んぼのカカシを名のり、自由民権運動家となった。その功績に、度重なる塩害に加えて明治政府が始めた課税措置等に苦しむ干拓地農民を救うために免税運動を行い、長い年月をかけ、50年間の免税を勝ち取った。

案山子は、漱石来遊7年後の明治37年に亡くなったが、墓碑には貫いた信念を誇示するかのように、贈られた「日潮士」の名が刻まれ、干拓地を見守るように有明海を向いて立っている。

特「鏡ヶ池」と前田家第二別邸

(かがみがいけとまえだけだいにべつてい)

※民間住宅内のため見学立入は不許可。



漱石が泊まった前田家別邸に隣接し、当時は前田案山子の別邸であったこの屋敷の庭池が「鏡ヶ池」の原形である。この屋敷には、宮崎滔天の依頼で辛亥革命後、袁世凱に追われた中国の革命家黄興が匿われていたこともある。

「私が身を投げて浮いている所を——苦しんでいる所じゃないんです——やすやすと往生して浮いている所を——綺麗な画にかいて下さい」

「鏡ヶ池」をめぐる画工と那美の会話のこの部分を描いたのが『草枕絵巻』の中の「水の上のオフエリア」。そして、その元になった絵が英国の名画「オフィーリア」(ミレイ作)。映画「崖の上のポニョ」の原点ともなった絵だ。漱石は、英国で「オフィーリア」に出会い、小天でのツナの言動とこの池が甦り「草枕」で融合させたのではないだろうか。

絵は2点とも草枕交流館に複製を展示してある。

⑩ 小説「草枕」の主舞台「前田家別邸」

(しょうせつくさまくらのしゅぶたい・まえだけべつてい)

このコースのテーマ「草枕」の旅の目的地。漱石は、当時温泉宿であったこの屋敷へ正月旅行として、熊本時代3番目の家(現熊本市新屋敷)から歩いて来た。

